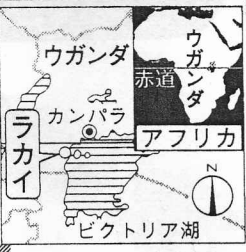


うめく「生」

—4

アフリカ・赤道直下から

1歳3カ月というのに、身長70cm、体重5.4kg。病院のベッドに横たわる女兒トゥムウエシゲちゃんは、生後5カ月のころから体重がほとんど増えていない。腕に刺さった点滴の針が、かろうじて「生」をつなぎ止める。付き添いの母ナバスンバさん(30)が、大き



「死の淵」さまよう1歳3カ月

母の不安「感染私も？」

なため息をついた。

ウガンダ・ラカイ。エイズ発祥の地だ。生後8カ月になったところ、トゥムウエシゲちゃんに発熱、下痢が続いた。占師に診てもらったが、一向に回復しない。週に1回だけ看護婦が巡回する地元診療所で、薬をもらうことにした。薬を飲むと一時的に症状は軽くなったが、3日後に再び返

した。詳しく診てもらったため、心配した母が入院させた。

ナバスンバさんほ5人の子の母だ。トゥムウエシゲちゃんの上に、10歳から4歳の4人がいる。

トゥムウエシゲちゃん以外はみな元気だ。しかし、病院の医師は、トゥムウエシゲちゃんをエイズと断言した。診療経験から

では、母は大丈夫なのか。子宮内で、出産時の産道で、そして出産後の母乳でも、母子感染はある。欧米では予防薬で産道での感染率が低下し、

母子感染率は抑えられてきた。しかし、ウガンダでは、高価な予防薬は使えない。帝王切開の奨励などで、ようやく感染率は20%程度に減少した。

同じ病棟に入院する患者の付添人たちが、集まってきた。状況が緊迫しているのが分かるのだろ

う。ナバスンバさんは腰を下ろして、トゥムウエシゲちゃんの頭にほおを付けた。頭部の肌にも、エイズの兆候が現れている。入院費用を持つてくる夫(52)はまだ来ない。

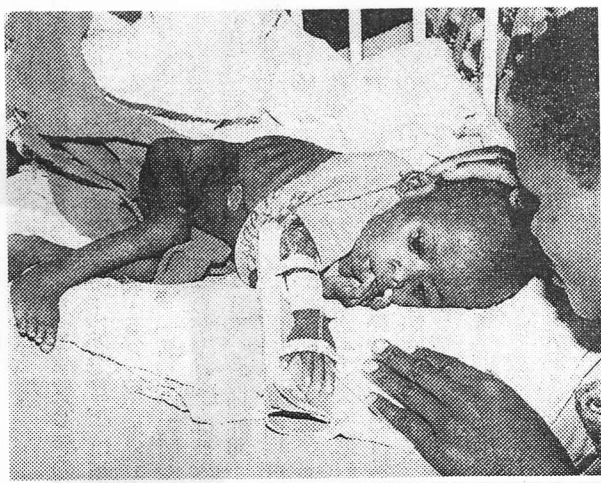
「朝から、お金を貸してもらおうよう知り合いを回

っているのです」夕日が沈んだ。残り日がベッドを照らす。暗くなった病室で、死の淵をさまようトゥムウエシゲちゃん。この子がエイズなら、自分は、夫は、そして他の子どもたちは……。ナバスンバさんの不安は、広がる

一方だ。 〓つづく

文 小倉 孝保
写真 玉置 勝巳

◆ 今年のキャンペーンでは国連機関などへの寄付に加え、ウガンダの子どもたちをエイズから救うためのプロジェクトをサ



やせたトゥムウエシゲちゃん。看護する母にも母子感染の恐怖が迫る。ウガンダ・ラカイで

ポートします。救援金は日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)に送金ください。大阪府 北区梅田3の4の5、毎